

# *Oxford English Dictionary* に見る古英語の転換

Conversions in Old English based on *Oxford English Dictionary*

小 原 真 子

島根大学法文学部言語文化学科

キーワード：古英語、語形成、転換、*OED*

## 1. はじめに

既存の語から新しい語を作り出す過程を語形成と言う。英語の語形成過程の中で、*bottle* (名詞：瓶) → *bottle* (動詞：瓶詰にする) のように語の形を変えることなく品詞を変える転換は現代英語の中では複合、派生に次いで生産的な語形成過程である。

この転換という語形成過程は、歴史的にはいつ頃から存在していたのであろうか。米倉 (2015 : 56-57) は、「歴史的にみると転換はもともと品詞別に異なる形をもっていた語が、古英語後期から中英語以降の語尾屈折の消失により同形となり形態上は区別がつかなくなった結果とも言える。(中略) これによって特に名詞を動詞として用いることへの道が開かれ、後期中英語では転換が頻繁に見られるようになり、初期近代英語では全く普通の語形成となったのである。」と論じている。古英語は現代英語とは異なり、主要な品詞ごとに特有の接辞が付加される言語であり、名詞や動詞の語の形を変えることなく品詞を変えることは不可能なため、上記の記述は一見妥当に思われる。古英語では転換はほぼ存在せず、中英語期から頻繁に見られるようになった語形成過程なのであろうか。

古英語の転換の実態を調査するため、本稿では50万語以上の見出し語を持ち、英語の語の歴史的変遷が分かる *Oxford English Dictionary* (*OED*) のオンライン版を利用する。*OED* を英語の語の実態を映すものとして利用し、語形成の調査をすることは Plag (1999) の *OED* の CD 版を利用した動詞化接辞の調査を始めとして行われている。*OED* のホームページ上の *History of the OED* に記載があるように、*OED* は2000年からオンライン版で利用できるようになっており、3ヵ月ごとに語や記載の見直しが行われている。オンライン版になってからも、どの語が転換で形成されたのかを検索することは最近まで難しかったが、2023年7月のプラットフォームの改定によって、*Advanced Search* を使用して語形成過程の検索をすることがより簡便かつ正確に行なえるようになった。小原 (2023) ではプラットフォーム改定

前に *OED* を活用して、1980 年以降の現代英語の転換の調査を行ったが、本稿では、11 世紀の古英語の時期の語形成の実態調査を行う。この調査から現代英語とは性質が異なるが、転換が古英語の頃から存在していたことを明らかにし、その形態や意味の特徴を叙述する。

## 2. *OED* で見る古英語の語形成の概要

まず、古英語の語形成の概要を見るために *OED* の Advanced search を用い、初出年が 11 世紀（1001-1100）の語を抽出した（2024 年 1 月 5 日最終確認）。この時期の見出し語の総数は 8,741 例であるが、その中で語形成の種類別の用例数は以下の通りである。

### (1) 11 世紀の英語の語形成のタイプ (Type of Formation)

本来語	(Inherited)	3,634
派生	(Derivative)	2,212
複合	(Compound)	1,593
借入	(Borrowing)	590
転換	(Conversion)	324
異形態	(Variant)	139
不確実	(Uncertain)	80
不明	(Unknown)	59
固有名	(Proper name)	30
縮約	(Shortening)	17
擬音語	(Imitative)	12
逆成	(Backformation)	1
未分類		50
計		8,741

これらの語形成のタイプの中から主要なもののみをグラフにすると図 1 の通りとなる。11 世紀の古英語の場合、本来語が全体の 42%、派生が 25%、複合が 18%、借入が 7% であり、表の左端の転換は存在しているものの、語形成の種類別では 4% を占めるのみであり、それほど生産的ではないようである。ただし、品詞別の形態がはっきりと分かれていた古英語であっても転換が語形成過程で存在していると *OED* で判断されていることは重要である。

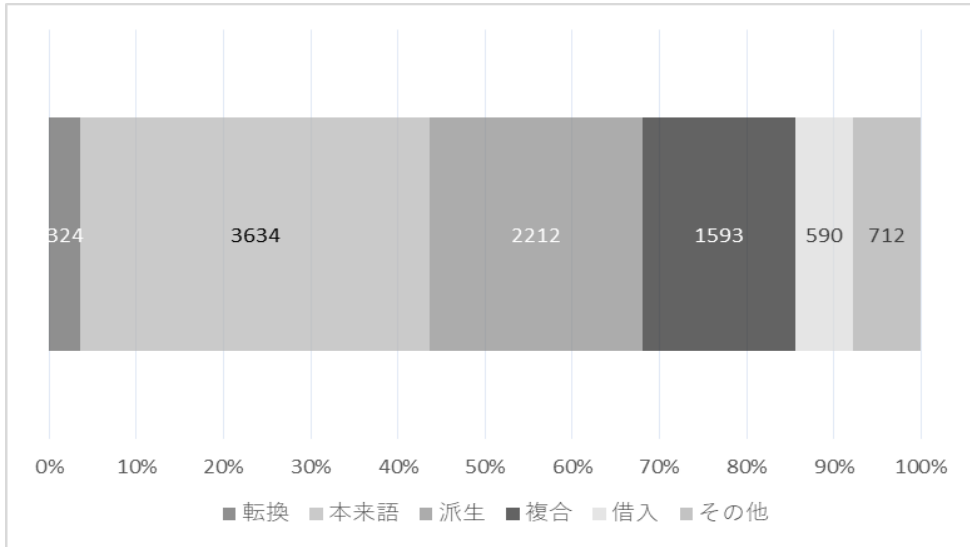


図 1 : 11 世紀の語形成の割合

また、語形成によってできた語の品詞別にこれらを分類し直してみると、別の傾向が見えてくる。図 2 は主要な品詞ごとに語形成を分類したものである。

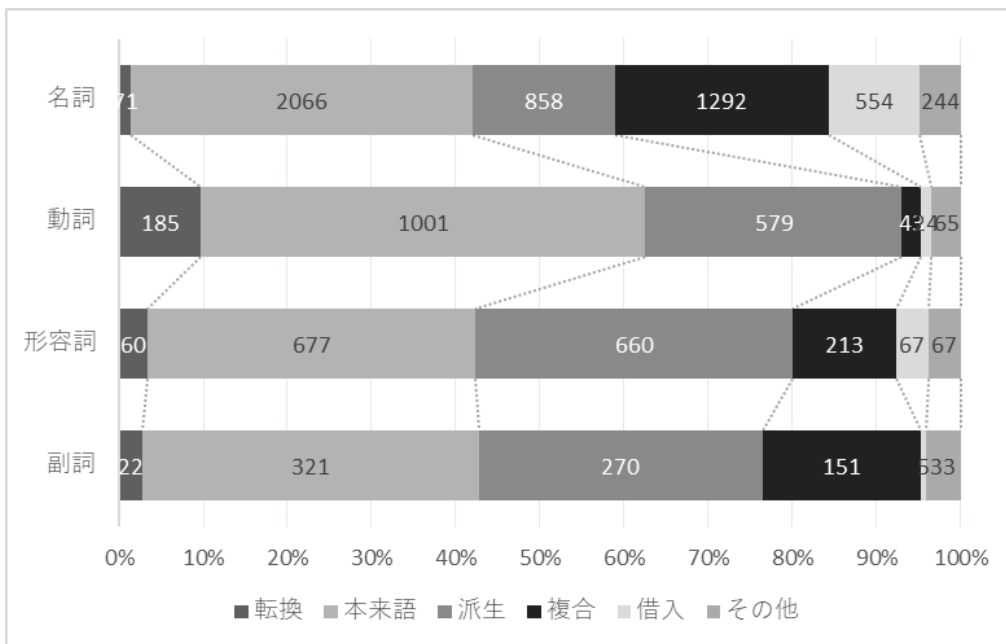


図 2 : 11 世紀の品詞別の語形成の割合

図 2 から明らかなように、古英語の時代から品詞ごとに好まれる語形成過程には違いがあり、転換の場合には、動詞になる語で 10%程度と、比較的よく使われる傾向にあることが見えてくる。転換は現代英語でも動詞を作ることが多い語形成過程であるが、この傾向は古英語の時代から変化がないようである。

次に、転換の元の語の語形成過程に関して概観してみよう。竝木（1985: 59）は「転換の例は大部分が単純語であるが、中には、接辞付加や複合による合成語の例もある」としている。この傾向に関して、小原（2023）で1980年からの30年間で新語として *OED* に新たに記載された語 211 例を調査したものを下記の表 1 にまとめ直したが、転換の元の語の語形成に関して、複合の割合が最も多く 42%、次いで語形成を経していない単純語が 27%である。少なくとも 1980 年代以降の 30 年間においては、竝木（1985）の主張とは異なり、転換は複合を経た語を元に形成されることが多いと言える。

表 1：1980 年 - 2009 年の転換の元の語の語形成の割合

元の語の語形成	用例数	割合 (%)
複合	88	42
単純語	56	27
縮約	20	9
派生	19	9
その他	28	13
計	211	

今回、古英語の元の語の語形成に関しては、*OED* の各語の **Factsheet** にある語源欄 (Etymology) を参考にした。検索結果で転換とされている 324 例の元の語形成を手作業で確認したところ、検索例の中に誤って分類されている派生語 2 例があったので、それらを除いて、残り 322 例の元の語の語形成をまとめたものが表 2 である。

表 2：11 世紀の転換の元の語の語形成の割合

元の語の語形成	語数	割合 (%)
本来語	250	78
記載なし	26	8
借入	17	5
派生	13	4
異形態	5	2
複合	4	1
不明	3	1
転換	2	1
不確実	2	1
計	322	

表 2 から明らかなように、古英語では転換の元の語が派生・複合であるものは、あわせても 5%程度である。反対に、古英語では転換の元の語はほとんどが本来語で、ここに借入語をあわせると 8 割を超える。これらは竝木 (1985) の言う単純語であり、古英語では竝木の主張通り、単純語から転換が起きていると言える。

次に、転換の品詞の方向性について確認してみよう。竝木 (1985) は名詞から動詞への転換が 1 番多く、動詞から名詞への転換が 2 番目に多いとしており、小原 (2023) の 1980 年台以降の最近の英語の調査でも同じ傾向が見られた。古英語ではどうであろうか。Plag (2003) が論じているように、転換の方向性に関しては転換でできた語と元の語の初出年、意味、使用頻度などを比較し、総合的に判断すべきであるが、ここでも *OED* の語源欄の記載を元に分類した。下記の図 3 の上の段は、転換で出来た語を大きく品詞ごとにまとめたものである。検索で確認した表 2 の転換の品詞別の語数と手作業で確認した語数に多少のずれが生じているが、傾向の把握をするには問題がない程度の違いである。また、図 3 の下段は手作業で転換の方向性を確認したものをまとめたもので、たとえば名詞転換動詞であれば、元が名詞である語が転換して動詞になったものである。

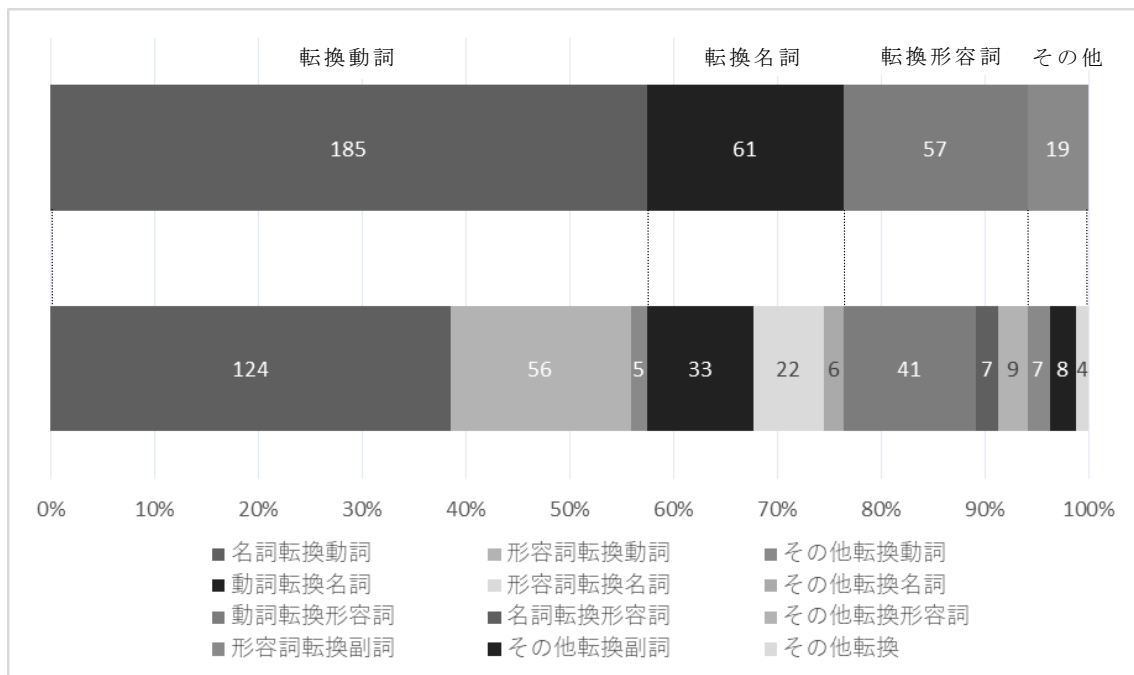


図 3 : 11 世紀の転換の方向性

図 3 の上段からは動詞に転換する転換動詞が 1 番多く全体の 6 割弱を占めていること、2 番目が名詞に転換する転換名詞、3 番目が形容詞に転換する転換形容詞でこの 3 つで 9 割を超えていることが分かる。

もう少し細かく元の品詞から転換した品詞の方向性を下段で確認してみよう。現代英語と同様に、名詞から動詞に転換する名詞転換動詞が 124 例で 1 番多いが、2 番目に多いのは形容詞から動詞に転換した形容詞転換動詞 (56 例)、3 番目が動詞から形容詞に転換した動詞転換形容詞 (41 例) である。現代英語で多い動詞から名詞に転換した動詞転換名詞 (33 例) は 4 番目となっており、古英語においては動詞—名詞間の転換に次いで、動詞—形容詞間の転換が多いことがわかる。また、転換の方向性に関しては、(2)に見られるように非対称性があることも注意しなければならない。

(2) 同じ品詞間での転換の語数の割合

名詞転換動詞	：	動詞転換名詞	124	：	33
形容詞転換動詞	：	動詞転換形容詞	56	：	41
形容詞転換名詞	：	名詞転換形容詞	22	：	7

以上観察してきたように、転換の生産性は品詞によって明らかに差があるが、このことに関連して、2 種類の「生産性」を区別することの必要性を長野 (2018) が指摘している。一つは新語を作る能力があるかないか

(either-or) の生産性で、もう一つが転換の起こりやすさの程度 (degree) の生産性である。OEDの記載からすると、古英語の時代から転換という語形成過程は存在すると考えられるため、either-or の生産性はあることになる。しかし、ここまで観察したように、degree の生産性には品詞間で明らかな差があり、たとえば名詞から動詞に転換する語の方が動詞から名詞に転換するよりも多い。この degree の生産性に関して、長野 (2018) は接辞付加との競合関係を考える重要性を指摘しており、「名詞から動詞を派生できる接辞の数が少なく、また、それらの接辞を使える基体の範囲も限られていること」(長野 2018: 75) から名詞転換動詞の degree の生産性の高さを捉えている。ただ、名詞転換動詞の生産性は接辞付加との競合関係で捉えられるかもしれないが、全ての degree の生産性を同じように説明できるかどうかは今後の検討が必要である。

2 節では、OED の 11 世紀の転換のデータから転換した元の語の語形成過程、転換の品詞の方向性など、おおよその傾向を観察してきた。古英語にも転換は存在すること、そして現代英語と同様に動詞に転換する語が多い傾向があるが、元の語の語形成過程は単純語が多く、転換の品詞の方向性においても動詞一名詞間の他、動詞－形容詞間でも多くの転換が見られるなどの違いが存在する。3 節では、転換の実際の例、中でも最も例が多い動詞になる転換の例を観察することで、古英語の転換の実態を概観する。

### 3. 古英語の転換の形態と意味の特徴

まず、どのような語が古英語の転換の例とされているのか、実例を観察してみよう。古英語の転換で出来たとされている語で頻度の高いものから、レベル 3 まで記載されている語を示す。この頻度情報は OED で現代英語の使用頻度を元にして 8 段階で表示されているものである。OED のホームページ上の Frequency に詳細が記載されているが、レベル 3 以上が一般的な語であるかどうかの境界と考えられる。以下の(3)-(5)の冒頭の数字は頻度のレベルを示したものである。

#### (3) 名詞転換動詞の例

7 : need, lose, love

6 : fire, head, ship, smoke, welcome

5 : bed, blossom, craft, curse, ebb, fan, feather, harbour, heart, hoard, martyr, net, note, outlaw, pepper, pine, seed, shadow, shame, shield, sweat, thief, thunder, word

4 : bridle, calve, fever, fold, fowl, game, harp, horse, hue, knee,

mist, moot, plight, sop, soul, thirst, tide, verse, web, witch,  
yoke

3 : bride, Christ, gem, hat, helm, inn, meat, mere, monk, organ,  
psalm, reme, rud, sty, tear, weapon

(4) 形容詞転換動詞の例

5 : blind, dusk, empty, fat, narrow, soothe, thin, wet

4 : crimp, dark, fair, full, one, room, slake, tithe, weary, yellow

3 : cold, hoarse, hot, little, manifold, old, proud, raw, red, sick,  
small, sweet, wan, whole

(5) その他転換動詞の例

5 : christen, further, out

4 : over

以上が転換で動詞になった語の例であるが、本稿の冒頭でも述べたように、古英語では品詞ごとに特有の接辞の付加があるにも関わらず、なぜ *OED* ではこれらの語が転換で形成されているものとして分類されているのであろうか。この点に関しては、先行研究でも見解に相違があり、たとえば Biese (1941) は古英語で転換という用語を使うことは適当でなく、*denominative* (名詞転用語) という用語を使うことを推奨している。これに対し、Marchand (1969) は古英語のゼロ派生、すなわち転換を認めている。この点に関して、転換の例として *OED* で検索した 322 例全てに関して、古英語の辞典のオンライン版 *Bosworth Toller's Anglo-Saxon Dictionary online* と *OED* の各語の *Forms* (語形) の情報を用いて形態的な対応関係を確認した。代表例を(6)に例示したが、転換して動詞になる語では、元の語と転換動詞とが、以下のような対応関係にある。

- |       |                     |                                |
|-------|---------------------|--------------------------------|
| (6)a. | 名詞 : lufu (love)    | 動詞 : lufian (to love)          |
|       | 名詞 : heafod (head)  | 動詞 : heafdian (to behead)      |
|       | 名詞 : scild (shield) | 動詞 : scildan (to shield)       |
| b.    | 形容詞 : wæt (wet)     | 動詞 : wætan (to wet)            |
|       | 形容詞 : grene (green) | 動詞 : grenian (to become green) |
| c.    | 副詞 : ut (out)       | 動詞 : utian (to put out)        |

(6a)に見られるように、名詞の語幹に接辞の *-an* または *-ian* を付加するこ



とで動詞が作られる。これらの動詞は全て弱変化動詞である。この動詞の接辞は規則的で、(6b)のように形容詞を元にした語も、(6c)のように副詞を元にした語でも、同じように語幹に **-an** または **-ian** を付加することで動詞が作られる。Marchand (1969) は名詞転換動詞の同様な例を網羅的に例示し、名詞に屈折接辞 **-an** または **-ian** を付加することによって動詞と対応しているとし、これを転換と捉えているのである。

動詞の接辞の **-an** や **-ian** が屈折接辞であるとはどういうことであろうか。屈折接辞は現代英語では3人称単数現在の **-s** や過去形の **-ed**、複数形の **-s** など、動詞や名詞が活用する際に必要な接辞であり、転換とは無関係にどの語にも現れる。転換は語の形を変えることなく品詞を変えるものとされているが、屈折接辞に関しては、動詞には動詞特有の屈折接辞が付加する (cf. *loves*, *loved*) し、名詞は名詞特有の屈折接辞を伴う (cf. *shields*)。古英語の動詞の接辞 **-an** や **-ian** も転換とは無関係にどの動詞でも見られ、たとえば *help-an* (*help*)、*bring-an* (*bring*)、*sell-an* (*sell*) など、本来語の動詞にも見られる。また、現代英語で屈折接辞と派生接辞との現れ方を考えてみると、現代英語で形容詞から動詞を派生する接辞の **-en** では、*black-en-ed*、*black-en-s* のように派生接辞 **-en** の外側に屈折接辞がさらに付加するが、古英語の **-an**、**-ian** などは活用する際には他の屈折接辞に置き換えられる。たとえば、*OED* の用例で *lufian* は、*luf-ap* (3人称単数現在)、*luf-o-de* (過去形) 等の語形に活用して使われている。古英語の屈折接辞 **-an**、**-ian** に関しては、接辞ではあるものの、現代英語で動詞の不定形を示す *to* と似た働きを持っていると言うことができるであろう。

似たような例として、長野 (2018) はスペイン語の *camino* (道・行程) と *caminar* (歩く)、フランス語の *nappe* (テーブルクロス) と *napper* (覆う) の動詞の接辞 **-ar** や **-er** を動詞に必要な屈折接辞であることから、転換の例と考えることを提案している。このように屈折接辞が付加するものも転換として考えると、(6)は語の形は異なるが、元の名詞、形容詞、副詞などに屈折接辞を付加し、転換でできた語と捉えることができる。

最後に、意味の面での特徴を指摘しておこう。古英語の時代の転換と現代英語の転換では、意味の違いが見られる場合がある。(6)の例では、ほとんどが現代英語と同じであるが、*head* の動詞形は「人の首を切る」の意味である。現代英語では「〈...に向かって〉進む」の意味が主であるのに対し、大きな違いがある。この他にも *bed* の動詞の意味が「ベッドを準備する」で、現代英語の「寝る」の意味とは異なる。名詞から動詞に転換した例を概観したところ、元の名詞を動詞の目的語として意味の転用が起こっている例が多い傾向にあるようであるが、これらの意味の転用については今後の検討課題と

したい。

#### 4. おわりに

本稿では、*OED*を用いて、古英語の転換に関して転換前の元の品詞の語形成過程や転換の品詞の方向性についての概略を観察した。実例を観察し、形態や意味の点で現代英語と異なる点があるが、転換が古英語の時代から存在している語形成過程であることを示した。

#### 【参考・引用文献】

- Biese, Y. M. (1941) *Origin and Development of Conversions in English*, *Annales Academiae Scientiarum Fenicae*, B XLV, Helsinki.
- Bosworth Toller's Anglo-Saxon Dictionary online* (2024) Available from <https://bosworthtoller.com/>
- Marchand, Hans (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München.
- 長野 明子 (2018) 「なぜ ice は動詞としても使えるのか? —現代英語における転換—」『英語学が語るもの』米倉綽・中村芳久(編), 63-86 頁. くるしお出版.
- 竝木 崇康 (1985) 『語形成』大修館書店
- 小原 真子 (2023) 「*Oxford English Dictionary Online* で見る英語の転換」『人間と文化』(島根県立大学松江キャンパス) 第6号, 99-108 頁.
- Oxford University Press (2024a) History of the *OED*. Retrieved from <https://www.oed.com/information/about-the-oed/history-of-the-oed/>
- (2024b) Frequency. Retrieved from <https://www.oed.com/information/understanding-entries/frequency>
- (2024c) *Oxford English Dictionary Online*. Available from <https://www.oed.com/>
- Plag, Ingo (1999) *Morphological Productivity: Structural Constraints in English Derivation*, Mouton de Gruyter.
- Plag, Ingo (2003) *Word-Formation in English*, Cambridge University Press.
- 米倉 綽 (2015) 『歴史的にみた英語の語形成』開拓社.